

清水凡生先生（「看護学統合研究」初巻から4巻までの編集委員長）を偲んで

独立行政法人国立病院機構賀茂精神医療センター精神科

（元呉大学看護学部）

滝 沢 韶 一

早いもので清水先生の訃報に接してから二ヶ月が過ぎようとしています。昨年の暮れの頃でしたか、先生を囲んで、看護師とケア・マネージャーを交えてフランス料理をご馳走になったことがあり、そのおり二次会に誘われたのにお断りしたことが最後の会話となりました。その時先生は既に食事が喉を通らない状態であつたらしく、ワインばかり飲んでおられたのが印象的でした。そのような状態にありながら、ご自身の体調不良などはおくびにも出されませんでした。

先生は呉大学（現広島文化学園大学）から身をお引きになってからは、東広島市内の老人保健施設にご勤務しておられました。本来小児科医であられた先生が、二度童（にどわらし）ともいうべき高齢者のケアの道に入られたことは特に異なことではなく、むしろ臨床医としての当然のご選択であつたかと思われまふ。人間の知能は、ことに流動性知能というのは二十歳を過ぎるころより緩やかに減退し、初老期を越えた頃よりさらに下降の一途を辿り、八十歳には十二歳児程度になると言われています。これが二度童と呼ばれる時期に相当する訳で、小児科医の登場する格好の場と考えてよいと思います。

先生は教授会での司会ぶりなどは峻厳を極め、大学の自治の原点は教授会にあることを常々力説しておられました。しかしながら、私たちがその意図を十分に理解しえず、先生のご期待に添えなかったのではないかと後悔しております。また研

究にたいする態度も厳しく、先生に師事されたK助教授に対して常々、「子育てを口実に研究の手を抜いてはいけない」と言われていたそうです。

また研究や臨床実践を活性化するには、学会活動が重要であるとの信念から全国規模の学会の開催のほか、中四国地区に多くの学会（小児保健、小児心身医学、思春期、小児腎臓病など）を設立されました。そして、会長職の傍らプログラムの作成、学会抄録の作成、さらには学会誌の編集まで自ら手がけられたそうです。

呉大学看護学部立ち上げという草創期のご苦労は如何ばかりであつたろうと、いまさらの如く思い直されます。看護職を独立した専門職として確立させることに貢献したいとの考えを強く持っておられたそうです。大学教育を専門的に高めるために教育課程を6年制にすべしとのお考えだったとも前述のK先生が述べておられます。

先生のお考えにより創設された「看護学統合研究」というユニークな機関誌が先生のご逝去にあい前後してその第10巻を発刊しえたことには、先生のご遺志がいくばくか反映されていると考える次第です。

先生の霊の安からん事と、広島文化学園大学看護学部のさらなるご発展を祈って追悼の言葉とさせていただきます。

編集部注：清水凡生先生は平成21年3月12日永眠されました（享年74歳）